



リスとムササビ

No.12

SCIURID INFORMATION

December, 2002

CONTENTS

リ・ムネット活動報告	「樹木医学会」から「樹洞シンポジウム」へ	佐野 明 …… 1
		繁田 真由美
国内のフィールドから	東京都青梅市で発見されたムササビの交通事故	金子 弥生 …… 4
リス類の疾病	ムササビ属 <i>Petaurista</i> の寄生虫—コクシジウム症について—	押田 龍夫 …… 6
海外のリス類	ロシア極東の齧歯類 (3) — シマリス—	V. A. Kostenko …… 8
		(訳/藤巻裕蔵)
お知らせ	INFORMATION	……10



リ・ムネット活動報告

「樹木医学会」から「樹洞シンポジウム」へ

佐野 明・繁田真由美

Akira Sano and Mayumi Shigeta

第7回樹木医学会大会に参加して

2002年11月9日、神奈川県藤沢市の日本大学湘南キャンパスで開催された第7回樹木医学会大会において、リス・ムササビネットワークとコウモリの会の共同で、「追われる樹洞性動物たち」と題するパネル展示を行いました。

ネットワーク会員のみなさんの多くは、「樹木医学」なる学問分野があり、さらに「学会」まであることをご存じなかったのではないのでしょうか。

近年、巨樹や古木をはじめとする樹木の保全に対する関心が高まり、それらの樹勢の維持回復のため、さまざまな「治療」が行われるようになってきました。その一環としてウレタンやモルタル等による樹洞の閉塞が行われるケースが増え（写真1、2）、ムササビやコウモリ類をはじめとす

る樹洞性動物たちが住みかを奪われる事例が各地で見られます。治療対象の多くは社寺林や公園の樹木ですが、山林の大径木がどんどん伐採される現状の中で、人間の生活圏内に残された木々の樹洞が動物たちのかけがえのない生活の場になっている例も少なくありません。その大切な場所に、樹木の「治療」が新たな脅威として加わりました。

樹洞を閉塞することについては、腐朽を止める効果などないこと、ましてや樹木を元気にすることはなく、時として大きなストレスさえ与えることが1970年代後半に指摘され、その後、多くの研究者の追試によっても確かめられています。しかし、このことは現場で樹木治療に携わる人たち（造園業者、樹医、樹木医など多様な人たちがいます）や治療を依頼する市民、発注する行政の担当



写真1 埋められた樹洞
山梨県上野原町のケヤキ（撮影：佐野明）

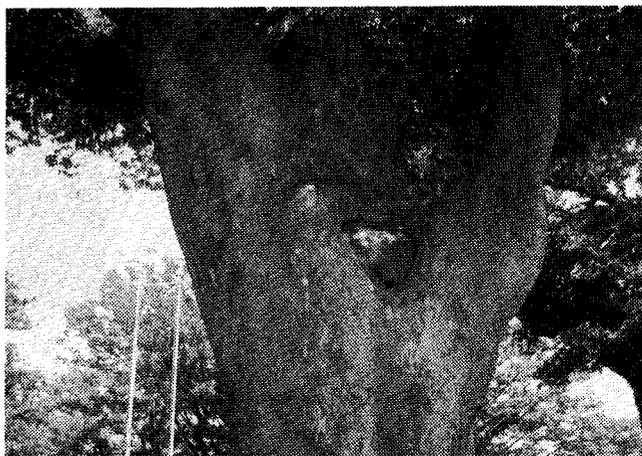


写真2 埋められた樹洞
長野県松本市のケヤキ（撮影：佐野明）

者には十分に伝わっていません。不必要な治療行為によって、これ以上、樹洞性動物たちが貴重な生息場所を失うことのないよう、広く訴えていくことが必要となっています。

そこで、樹木医学研究者や樹木医が全国から集まる樹木医学会でのパネル展示を思い立ち、趣旨に賛同してくださった安藤元一さん、大久保未来さん、三笠暁子さん、水野昌彦さん、山本輝正さん、安井さち子さん、上條隆志さん、湯浅健さんから8名とともに参加しました。

展示の内容は樹洞に住む動物たち（ムササビ、ヤマコウモリ、フクロウ、ブッポウソウ等）の生態写真、ウレタンで埋められてしまった樹洞の写真および樹洞の保全を訴えるアピール文です（写真3、右ページ参照）。

参加者は約200名で、学会としてはこじんまりとしたものでしたが、多くの方に展示をご覧いただき、意見交換をすることができました。また、後日、「これまで樹洞の中にいる動物のことまで思い至らなかったが、これからは関心を持って見ていく」というメールを下された樹木医さんもありました。まことにささやかな活動ではありましたが、ここから樹洞保全の輪が少しでも広がっていくことを願っています。

なお、今回のパネル展示に際しては、動物写真家の中川雄三さんから素晴らしい写真を無償で提供していただきました。また、リス・ムササビネットワークとコウモリの会からパネル制作費をご援助いただきました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



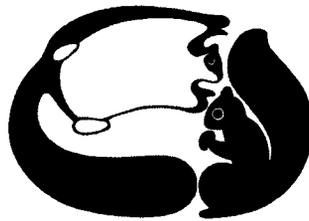
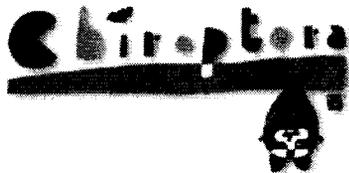
写真3 樹木医学会パネル展示全景（撮影：山本輝正）

追われる樹洞性動物たち

樹木の幹や枝にできた空洞、すなわち「樹洞」はムササビやコウモリなどの哺乳類、フクロウやキツツキなどの鳥類、さらには両生爬虫類や昆虫類などさまざまな野生動物たちにとって、大切な休息場所であり、子育ての場でもあります。しかし、山林では大径木が次々と伐採され、かれら樹洞性動物たちはその住みかを追われ続けてきました。そして、今、社寺林や公園に残された巨樹や古木の樹洞さえもウレタンやモルタル等で埋められようとしています。つまり、樹木の「治療」が新たな脅威として加わりました。

樹木治療に携わるみなさん、もしも治療しようとする木に樹洞があったらどうしますか？ その樹洞は動物たちの貴重な住みかかも知れません。今は利用されていないくとも、今後大切な生活の場になるかもしれません。樹洞を閉塞しても樹木の腐朽を止める効果のないことが指摘されています。それでも樹洞を埋める必要があるのでしょうか？ 樹洞を埋める前に、ぜひ一度このことをお考えくださることを私たちは願っています。

コウモリの会 / リス・ムササビネットワーク



そして、「樹洞シンポ」へ

樹洞を動物の住みかとして保全して行こうという私たちの取り組みは、今始まったばかりです。そして、樹洞性動物を保護していくためには、樹木治療のあり方を考えるだけでは不十分なのは言うまでもありません。樹洞のできる大径木の生い茂る森林を広く残していくことが何より重要です。

そこで、次のステップとして、「樹洞シンポジウム：樹洞は誰のもの？—樹洞性動物の保護と樹木保全の両立を目指して」を企画しました。実行委員会は樹木医学会の参加者を含むリス・ムササビネットワークとコウモリの会の有志17名で構成され、安藤元一さんが代表を、筆者ら2名が事務局を務めます。

このシンポジウムの第一の目的は、樹洞がきわめて多様な動植物種あるいは人間とかかわっていることを、異なる立場の参加者が集まって共通理解とすることにあります。樹洞に関わるさまざまな問題、研究事例、保全事例を、樹洞性動物の研究や保護、林業、樹木治療、森林行政等に携わる多くの方々からご報告いただき、自由な意見交換をしながら樹洞の保全についての方向性を探っていきたいと考えています。

詳細については本号に同封した案内文（チラシ）をぜひご覧いただき、ひとりでも多くの方がご参加くださることを願っています。

（佐野明：三重県科学技術振興センター、
繁田真由美：株式会社野生生物管理）

東京都青梅市で発見されたムササビの交通事故

金子 弥生

Yayoi Kaneko

金子弥生さんはアナグマの研究者で、1998年東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程単位取得満了退学後、トヨタ財団研究員を経て、国土交通省国土技術政策総合研究所（茨城県つくば市）で生態系ネットワークの研究プロジェクトに携わられた後、現在イギリスのオックスフォード大学へ留学されています。今回はフィールド巡回中に遭遇したムササビの交通事故についてフィールドでのエピソードを交えてご報告いただきました。研究者の立場として、アナグマをはじめ動物たちへ寄せる真摯で奥深い姿勢がひしひしと伝わってきます。

2002年は不思議な年だった。私は1990年より東京都西多摩郡日の出町（図1）でアナグマの調査をはじめ、アナグマの調査地のすぐ近くの青梅市西北部の和田というところに住み始めてから6年になる。2002年は、茨城県のつくばで働いた3年が終わり、イギリスへ出発するまでの間、青梅市の自宅で家族や猫達、日の出町のアナグマ達とのんびり過ごそうと計画していた。ところが、つくばの中小型哺乳類の生態系ネットワークの仕事の後任がなかなか決まらず、引継ぎできないまま、気がついたら夏が終わろうとしていた。そんな8月の終わりに、東京都鳥獣保護員の神田栄次さんから、「日の出町の調査地にアライグマがすみ始めたらしい」という情報が入ってきたのである。情報によると、アライグマは日の出町の餌づけ民家周辺をうろついているらしい。その場所で餌づけされて

いるアナグマ家族の中核的存在のメスアナグマは通称「ふさちゃん」と呼んでいる、8歳以上にもなるベテランママである。わりと人慣れしているので、テレビ番組でその子育てぶりが紹介されたこともある。ふさちゃんは毎年3～4頭の子供を生んでいるが、今年はアライグマらしき動物がいるせいか、1匹しか育っていないという話だった。

いきなり冷水を浴びせられたような気がした。アライグマの野生化は関東では神奈川県鎌倉市で顕著であるし、西多摩でも1995年あたりから多摩川沿いに野生化の情報が入り始めていた。昨年からは、青梅市中央部の永山というところで、アライグマに餌づけをはじめの人が出始め、地元の新聞には「里山の動物アライグマ」などという、とんでもないタイトルの記事が掲載されたりもした。だから日の出町にも、いつアライグマが入っても

おかしくない状況だったのに、のんきに構えていたのが悔やまれた。しかし実際は、アライグマがアナグマやタヌキなどの在来種に与える影響はほとんど知られていない。ただ、食性や生活様式が似ているので生態的地位に近い可能性が高い上に、アライグマの方が体が大きく力も強そうなので、アナグマとタヌキには影響が出るだろうという見方がほとんどである。研究という観点から見れば、日の出町の状態を冷静にモニタリングすればよいのかもしれないが、10年以上この地域のアナグマを見てきたため、感情的にどうしても我慢がなかった。アライ

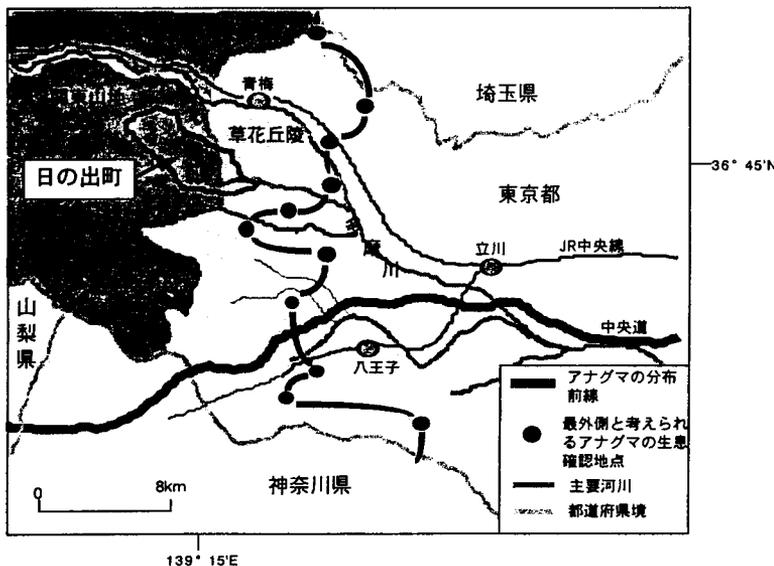


図1 東京都西部におけるアナグマの分布前線（金子，2000より作成）と調査地（東京都日の出町）の位置



写真1 交通事故にあったムササビ

グマの保定方法などについて北海道の研究者達に協力してもらい、「とにかく現状把握」のための捕獲をはじめた。

ムササビの交通事故死体を見つけたのは、早朝のわなの見回りへ行く途中だった。青梅市の自宅から日の出町の調査地へ出るには、梅ガ谷峠という、御岳山から長淵丘陵へ続く尾根を越える小さい峠を越えていくのだが、ムササビの死体は、青梅市側の、道路が森林に入って間もない場所で見つかった。その場所は、よく道路を横断する動物をみかける所だった。アナグマのテレメに行く途中に、ノウサギやリスが道路を横断するのを見たこともある。わたしにとってのムササビは、長い夜のテレメを応援してくれる（ような気がする）仲間のような存在なのである。中型食肉目の追跡では調査中ほとんど姿が見ることができないので、電波を聞きながらムササビを見ては、「ああ、こんな風に観察できたら。」とため息をつき、一緒に夜明けを待った。

しかも、そのムササビはメスだった（写真1）。8月末は、授乳中である可能性が高い。さらに、その交通事故の発生地点は、道路によって分断された住宅地よりの二つの小さい林、奥山から続く大面積の林が接する地点だった（写真2）。しかもその近くのダンプ駐車場は最近拡大され、ムササビが木から木へ飛び移りながら渡れそうな連続したスギの木が何本も切り倒されたばかりだった。授乳中のムササビママは、交通量が増え続ける

土日の夜は ローリング族でいっぱいになる梅ガ谷峠を、毎日のように歩いて 渡っていたかもしれない。さらに、青梅市和田あたりは、都市域に向かってのムササビの分布前線に近い地域でもあるので、この1匹のメスムササビの死は、その地域のムササビの存続にとって、とても大きな影響があるのかもしれない。

さて、日の出町のアライグマ事件は、どうやら疥癬の蔓延後久しぶりに姿を見せた若いタヌキを地元の方が見間違えたという、これまた奇妙な結末を迎えた。病気が蔓延せずに、いつもタヌキと接していれば、こんな騒ぎにならないのに、いくらテレビでタヌキを見ることができたとしても、本物の野生動物との接点が減っていくことは、その生息地に住む人々にとっても、思いがけない影響があるのかもしれない。これは私にとっても同じで、もしかしたら、夜のテレメを見守ってくれる友人がひっそりと姿を消すのかもしれないと思うだけで、いてもたってもいられない気持ちになる。

(金子弥生：Wildlife Conservation Research Unit
Department of Zoology University of Oxford)

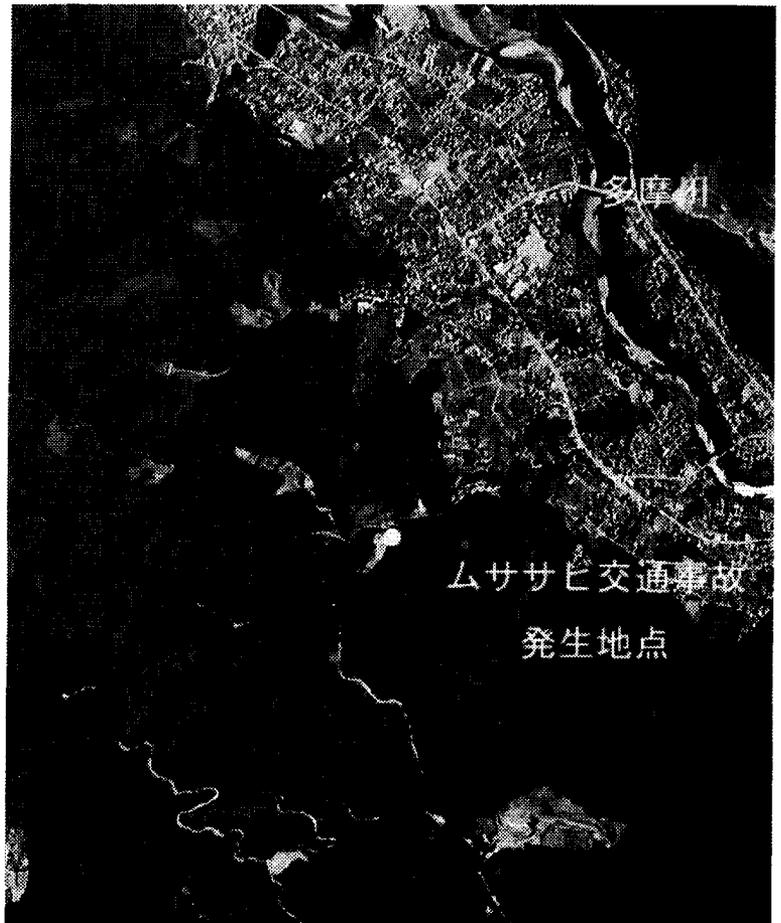


写真2 ムササビ交通事故発生地点



ムササビ属 *Petaurista* の寄生虫—コクシジウム症について—

押田 龍夫

Tatsuo Oshida

1990年のことである。当時弘前大学理学部生物学の研究生であった私は、ペットショップ等で販売されていた野生のムササビ（ホオジロムササビ *Petaurista leucogenys*）計12個体を入手し、染色体の研究を行うために飼育していた（注：現在ムササビの狩猟に関する規制は厳しくなっており、安易に捕獲・飼育することは禁止されている）。ところがこの年の5～6月にかけて、ムササビ達がたて続けに下痢を発症し、1ヵ月足らずの間に10個体が死亡するという惨事に見舞われたのである。

私はこの死因を解明すべく2個体のムササビの糞便から寄生虫の検査（通常の浮遊法）を行ったのであるが、その際にコクシジウムのオオシスト（接合子嚢）を多数検出することができた（写真1）。成熟オオシストの内部には、4個のスポロシスト（孢子嚢）が認められ、このコクシジウムはアイメ

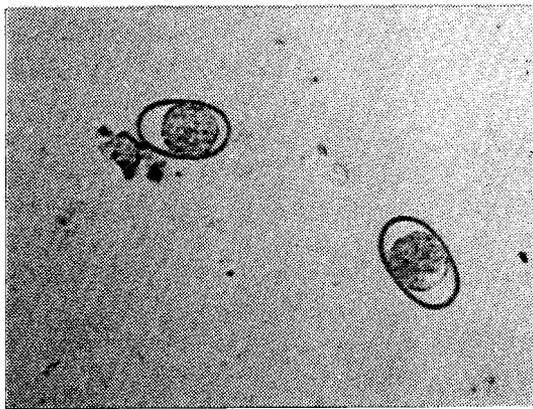


写真1 ムササビから検出された
発育過程のオオシスト

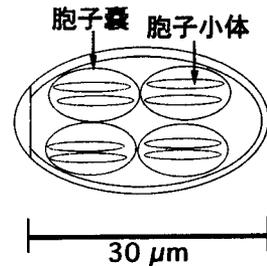


図1 アイメリア属の成熟オオシスト

リア属（*Eimeria*）のものであることが明らかであった（図1）。なお、ここで用いている寄生虫用語の解説については図2を参照されたい。

コクシジウムの寄生がムササビ達の直接的な死因であるのか否かについては不明であったが、健康上の大きな障害となっていたことは明らかであろう。この一件から、私はムササビとアイメリアとの関係に興味をそそられ文献等を漁ってみた。アイメリアは、多くの野生齧歯類から検出例が報告されており（Levine and Ivens, 1990）、ムササビ属を含めた滑空性リス類からも多くの種が確認されている（表1参照）。アイメリアの感染は、以下にも述べたが糞便中に排出された成熟オオシストの経口感染によって生じる。飼育下のオオアカムササビ（*Petaurista petaurista*）がしばしばケージ内で食糞を行うのを私は観察しているが、脱糞を枝上で行う野生の滑空性リス類でどのような機構によって個体間感染が成立するのかは不明である。しかしながら、アイメリアの感染を予防する

— [コクシジウムとは？ アイメリアとは？] —

コクシジウムとは孢子虫類の孢子虫綱コクシジウム亜綱に分類される寄生虫の総称である。コクシジウム亜綱はさらに幾つかの科に分けられているが、その中のアイメリア科アイメリア属の寄生虫が今回ムササビで見られたものである。アイメリア属の宿主は、鶏、兎、牛、豚、等々…である。感染動物の糞便中に排出された成熟オオシストは、経口的に別の個体へと感染し、その体内（主に小腸）で一定の生活サイクルを展開する（図2）。(1) シゴニー期（増員増殖期）には無性生殖によってメロゾイト（娘虫体）を多数産生し、続く(2) カートゴニー期（生殖母体形成期）にはメロゾイトから成長したマクロガメートサイト（雌性生殖母体）・ミクロガメートサイト（雄性生殖母体）の有性生殖が行われ、チゴート（接合体）が作られる。さらに(3) スポロゴニー期（孢子形成期）にはチゴートが成長を続け、最終的に感染型の成熟オオシストが糞便中に排出されるわけである。感染個体には、下痢、貧血、消瘦などの症状が認められ、急性経過によって死亡する場合と、慢性に経過し死亡はしないが衰弱が認められる場合とがある。また、治療薬としてはサルファ剤が有効である。

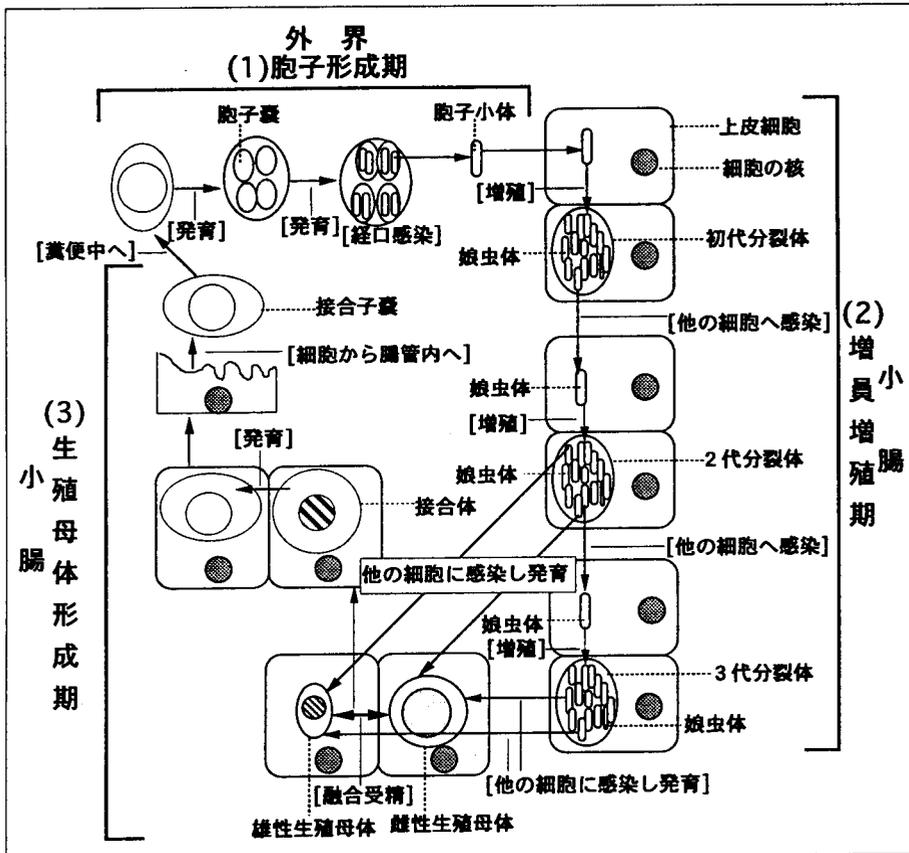


図2 アイメリア属の生活史

ために飼育下において私達が気を付けるべきことは、糞便の処理を中心とした衛生的な環境の整備であろう。

■引用文献

Bond, B.B. and Bovee, E.C. (1958) A redescription of an Eimerian coccidian from the flying squirrel *Glaucomys volans*, designating it *Eimeria parasciurorum* nov. sp. J. Protozool. 4: 225-229.

Colley, F.C. and Mullin, S.W. (1971) New species of *Eimeria* (Protozoa: Eimeriidae) from Malaysia squirrels. J. Protozool. 18: 400-402.

Dorney, R.S. (1962) A survey of the coccidia of some Wisconsin Sciuridae with descriptions of three new species. J. Protozool. 9: 258-261.

Levine, N.D. and Ivens, V. (1990) The Coccidian Parasites of Rodents. CRC Press, Inc., Boca Raton, Florida

Ray, H.N. and Singh, H. (1950) On a new coccidium, *E. petauristae* n. sp. from the intestine of a Himalayan flying squirrel, *Petaurista inornatus* (Geoffery). Proc. Zool. Soc. Bengal. 3: 65-70.

Roudabush, R.L. (1937) Two *Eimeria* from the flying squirrel, *Glaucomys volans* (sic). J. Parasitol. 23: 107-108.

(押田龍夫：台湾東海大学生物学系分子生態学研究室)

表1 滑空性リス類から報告されたアイメリア属寄生虫

寄生虫名	宿主名	文献
<i>Eimeria malayensis</i>	オオアカムササビ <i>Petaurista petaurista</i>	Colley and Mullin (1971)
	シロフムササビ <i>Petaurista elegans</i>	Colley and Mullin (1971)
<i>Eimeria petauristae</i>	オオアカムササビ <i>Petaurista petaurista</i>	Ray and Singh (1950)
<i>Eimeria aeromysis</i>	クロムササビ <i>Aeromys tephromelas</i>	Colley and Mullin (1971)
<i>Eimeria hylopetis</i>	オレンジクサビオモモンガ <i>Hylopetes lepidus</i>	Colley and Mullin (1971)
<i>Eimeria dorneyi</i>	オオアメリカモモンガ <i>Glaucomys sabrinus</i>	Dorney (1962)
<i>Eimeria glaucomydis</i>	アメリカモモンガ <i>Glaucomys volans</i>	Roudabush (1937)
<i>Eimeria parasciurorum</i>	アメリカモモンガ <i>Glaucomys volans</i>	Roudabush (1937), Bond and Bovee (1958)



ロシア極東の齧歯類(3) — シマリス —

V. A. Kostenko (訳/藤巻 裕蔵)



リス科 Sciuridae Fischer, 1814

シマリス *Tamias (Tamias) sibiricus* Laxmann, 1769

分布域

シマリスの分布域はロシアのヨーロッパ地方北東部、シベリア、カザフスタン北東部、ロシア極東、モンゴル北部、中国中部、北部、北東部、朝鮮半島、日本の一部の島である。

これらの地域でシマリスは、北はアナディール湾からプリモーリエ南部、サハリン、シャンタル諸島、国後島までの森林に普通である(図1)。

択捉島にシマリスが生息するという Voronov (1974a) の記述は、雪上の足跡の観察に基づいている。私の考えでは、彼の記述は信頼できない。私は択捉島ではシマリスを観察していないし、地元住民も見ることがない。カムチャツカでこの種は早くにいなかったが、今世紀初めからコリヤーク高地からカムチャツカ西岸沿いにパラナ町まで侵入した。

分類と亜種の分布域

わが国の分布域には、次の4亜種がいる：*T. s. asiaticus* Gmelin, 1778、マガダン州、コリヤーク高地、カムチャツカ州北部、ハバロフスク地方北部(南はスタノヴォイ山脈とオホーツク海沿岸のアヤン町付近まで)；*T. s. uthensis* Pallas, 1811、プリアムーリエ [訳注：アムール川沿いの地域] (プリモーリエ南部を除く)、サハリン、シャンタル諸島、北はスタノヴォイ山脈とオホーツク海沿岸アヤン町付近まで；*T. s. orientalis* Bonhote, 1899、沿海地方南部；*T. s. okadae* Kuroda, 1932、国後島(南千島)。

分布と生態分布

分布域南部でシマリスは、小さな孤立林や無立木地内の川沿いの灌木林から大面積の森林まであらゆるタイプの森林に生息し、ほどこにでも分布する。生息密度が高いのは、おもにシホテ・アリン山脈山麓部のうっ閉していないチョウセンゴヨウ・広葉樹林(原生林も伐採後の二次林も)、山地河川沿いの林床植物や倒木の多い森林である。これらの地域にはシマリスにとってよい隠れ場がある。これらの場所では堅果や漿果のなる高木や低木があって、様々な時期に実り、安定した食物源となっている。相対生息数は、増加期やピーク期の年には自然環境における100トラップナイト当たり3~5頭から伐採跡周辺の9~12頭までである。中程度の密度の地域では、食物現存量に応じてモミ・トウヒ林や山腹のナラ萌芽林で見られる。これらの場所では、生息密度の増加期やピーク期の年に相対密度は100トラップナイト当たり0.5~1頭である。垂直分布の上限はハイマツ林限界と一致し、球果が熟する時期には近くのトウヒ・モミ林からハイマツ帯に移動してきて、ときには集中することがある。このような所では、山頂のがれ場でナキウサギと共存している。ハンカ湖沿岸地域やゼヤ・ブレヤ平野の森林のない環境では低密度で、山頂部や谷の斜面、また川沿いの灌木林に生息している(Kostenko & Nesterenko, 1989b)。これらの場所では、秋に穀類やウリ類の畑の縁沿いに集まってくるのが観察される。最近野火で焼けた林では生息数は少ない(ピーク期でも100トラップナイト当たり0.1頭以下)。

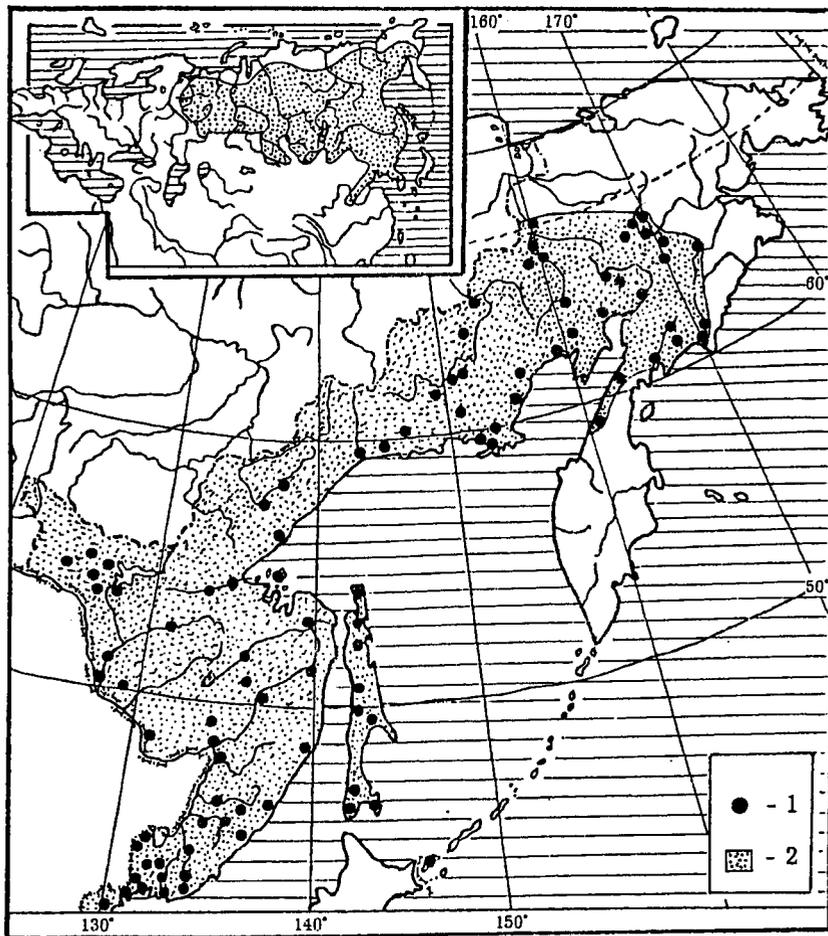


図1 ロシア極東と旧北区（上部挿入図）におけるシマリスの分布 1=発見場所、2=分布域

シホテ・アリン北部では生息数は非常に少ない。この地域ではよく川沿いの低木林やナラ・シナノキ林、またコスタータカンバ・チョウセンゴヨウ林にも生息し、針広混交林、トウヒ・コケ林やトウヒ・ノガリヤス林では非常に少ない。うっ閉したカラマツ林では生息数はさらに少ない。

アムール州ではシマリスはどこにでも分布し、生息密度が高い（100トラップナイト当たり1~2頭以下）のは、森林帯（ゼヤ自然保護区、ヒンガン自然保護区）の、マツ林や南部カラマツ・マツ林の灌木・草本の生育する環境、また広葉樹河畔林である。カラマツ林、とくにカラマツ・ミズコケのマーリ〔訳注：低木が疎生する湿原〕、またナラ低木・草本類の林で生息数は非常に少ない（Kostenko, 1984b）。ゼヤ・ブレヤ平野ではシマリスはブレヤ川右岸の落葉広葉樹河畔林や農耕地に残る低木林で見られる。

サハリン南部でシマリスはまれで、おもにカラマツ低木林にいる。エジノ・サハリンスク谷の針広混交林やヤナギ河畔林ではまれに見られる。サ

ハリン中部や北部、とくにハイマツ林では普通で、私はトルドヴォエ町、トイモフスコエ町、ノグリキ町、オハ市のハイマツ林で観察した。

国後島でシマリスは川沿いの斜面に好んで生息し、所々に落葉広葉樹が混交するイチイ・トウヒ・モミ林でまれではないが、生息数の多い所は見られない。

ハバロフスク地方北部のツグロ・チュミカンスク地域やアヤン・マイスク地域にも分布するが、生息数は多くはなく、大部分は河畔低木林に集まっている。マガダン州のオホーツク地域、またギジガ川、ペンジナ川、アナディール川の流域では普通ドロノキ・ケショウヤナギ河畔林やハイマツが混交するカラマツ林に普通に生息しているが、生息数は少ない。

コリヤーク高地西部（シマリスの分布東限）でシマリスはドロノキ河畔林やハイマツ林にもいる。この地域における生息数は非常に少ない。パハチャ川上流部沿いにおける2週間の調査で、単独個体を1回見ただけである。

食性

典型的な狭食性である。極東の分布域の大部分で主要な食物は針葉樹（おもにチョウセンゴヨウ、ハイマツ、カラマツ）や落葉広葉樹の種子、イネ科草本やスゲ類などの草本類の種子、いろいろの漿果やキノコ、コケの胞子嚢である。植物の栄養部（春）、腹足類、大型昆虫、小型鳥類やその卵の摂食も観察される。農耕地では、草本類の種子以外に穀類、マメ類、ウリ類を食べるが、家庭菜園では灌木や高木の実や漿果を食べる。チョウセンゴヨウやハイマツの実が熟する秋には、またウリ類や穀類の種子の実る時期には、これらの場所への移動が見られる。

繁殖

発情の兆候（繁殖期のなき声、雄による雌の追いかけ）は越冬穴から出たときから見られるが、頻りに観察されるのは、分布域南部では4月中頃から、北部では5月初めからである。この時期まで普通早朝の気温はまだ低い。発情は1ヵ月続く。妊娠期間は29～30日で、哺乳期間もほぼ同じである。産子数は、南（3～9頭、平均5.3～5.5頭）から北（3～11頭、平均5.5～7.5頭）になるにしたがって多くなる。普通、雌は年に1回だけ出産するが、分

布域南部では一部の個体は2回出産する。幼獣の出現は、分布域南部では5月初めから見られ、北部ではやや遅れる。6月初めから、幼獣は独立生活をするようになり、速く成長し、7月初めには成体の大きさになる。性成熟は翌年である。

生活様式と隠れ場

地上・樹上生活をする。おもに地上を移動し、採餌するが、危険がせまると樹上に逃れる。

昼行性である。河岸段丘斜面の樹木の根の下や堆積した石の下に造られた巣穴内で冬眠する。分布域南部では、低い位置にある樹洞によく入る。春に冬眠からさめ、地上に出てくるのは、分布域南部では3月末～4月初め、北部では4月～5月である。冬眠に入るのは、それぞれ11月末と9～10月である。

巣穴は、普通直線状で短く、平均約1mで深さ30～50cmにやや細長い巣室がある。そこに木本類の葉、草の茎、コケで巣を造る。同じ巣室の巢材の下にいろいろの種子からなる貯食もあり、普通その重量は1～2kgに達し、穀類畑周辺では5～6kgにもなる。よく巣室から行止りの小さな坑道が出ているが、その末端には糞場がある。

(訳)藤巻 裕蔵：帯広畜産大学名誉教授)

お知らせ INFORMATION

掲 示 板 Bulletin Board

■ 新刊案内 1

「哺乳類の進化」

【著者】遠藤秀紀

【定価】本体5,000円＋税

【体裁】A5判・横組・400頁

【発行】東京大学出版会 (TEL: 03-3812-7915 FAX: 03-3811-4254
E-mail: komyo@utp.or.jp)

本書では、まず最初に哺乳類の定義および哺乳類の歴史が概説されています。つぎに遠藤氏の専門分野であ

る機能形態学から見た哺乳類の移動様式および採食機構の進化が詳説され、さらに、日本で出版されている類書ではおそらくはじめてと思われる内臓、特に消化器官等に関する進化的考察が述べられています。続いて日本の哺乳類の系統地理学的话题が提供され、そして最後には進化のこののみならず遠藤氏ご自身の昨今の日本の哺乳類学に対する哲学が雄弁に語られています。解剖学・形態学・進化学の専門用語が多く使われているため一般の読者の方には難解かもしれませんが、日頃、哺乳類（野生でも家畜でも..）と接している方には難しくともおすすめの1冊です。専門用語を調べながらぜひ一読されてみてはいかがでしょうか？

(文責：押田龍夫)



■ 新刊案内 2

「外来種ハンドブック」

【編集】日本生態学会

【監修】村上興正・鷲谷いつみ

【定価】本体4,000円＋税

【体裁】B5判、横二段組、約400頁

【出版年月】2002年9月

【発行・発売】地人書館

執筆者総数約150名、140種以上の外来種と18の地域事例を記載。日本における外来種問題の現状と課題に関して、日本生態学会外来種検討作業部会を中心とする研究者、中央省庁および地方自治体、NGOの活動を網羅したはじめての総合的なハンドブックである。

<本書の特徴>

- ① 前半に総論として、外来種の基本的事項から現状および管理のあり方、国や地方行政などの取り組み、法整備に向けての提案をまとめ、後半に各論として、さまざまな生物種や地域を具体的に挙げた事例集をまとめた、日本初の外来種資料集。
- ② 事例集では、140以上の生物種と、鳥嶼・湖沼・海洋など外来種の影響が特に大きな地域について1項目につき1~3ページで解説。わが国で現在報告が可能な外来種のほとんどすべての事例を網羅した。
- ③ 執筆者は生態学会員を中心に、国土交通省・環境省・農林水産省および地方行政官、NGO、現場で対策にかかわるその道のエキスパート約160名。外来種の生態や侵入経路、生態系への影響、経済的被害状況、侵入防止・駆除対策までを、最新の情報をもとに紹介する。
- ④ 巻末資料として、最新の日本の外来種リスト付き。脊椎動物、無脊椎動物、植物、寄生生物など、現在、侵入・定着が把握できる日本の外来種約2,300種を記載した。

<割引販売について>

- ◎ 紹介割引価格：3,600円（税込み、送料サービス）
- ◎ 申込先および方法：以下の1)~5)をご記入のうえ、リス・ムササビネットワーク事務局まで（BXQ01747@nifty.ne.jp）ご連絡ください。事務局から、地人書館営業部宛に注文いたします。

- 1) 紹介割引販売希望
- 2) 書名：外来種ハンドブック
- 3) 冊数
- 4) お名前、郵便番号、お送り先住所、電話番号
- 5) e-mailアドレス

- ◎ 発送・お支払い方法など：料金は後払いです。ご注文いただいた皆さまへ、地人書館営業部から郵便振替用紙を同封して本をお届けします。到着後2週間以内にお近くの郵便局から代金をお振込ください（振込手数料不要）。

新刊案内 3

「かながわの自然図鑑3 哺乳類」

【編者】神奈川県立生命の星・地球博物館
【定価】本体1,600円＋税
【体裁】B6判、144頁（カラー104頁）
【出版年月日】2003年1月31日
【発行・発売】有隣堂

洞窟や樹洞にすむコウモリ、山奥のツキノワグマやカモシカ、山麓から森林にすむリスやヤマメ、草原や耕作地にすむネズミ類、平野部を追われて山地にくらすシカやキツネ、街中のタイワンリスなど神奈川県では陸生哺乳類51種が記録されている。

本書はそのすべてを生態写真で紹介し、あわせて野生哺乳類が抱える問題点などを指摘しながら、人間との共生の道を探る。

会報交換 第3弾

「野生鳥獣研究紀要」

栃木県県民の森管理事務所から出されている研究報告です。当事務所では、栃木県内の野生鳥獣に関する試験研究および傷病鳥獣の救護を行っています。平成13年度（No.28）では、「人工授精によるヤマドリ生産性向上のための試験」「ニホンジカにおける妊娠率地域格差の決定因子に関する考察」など、専門的な内容でした。この他、傷病鳥獣の救護結果や病因などが毎年報告されています。

●連絡先：栃木県県民の森管理事務所 〒329-2514 栃木県矢板市長井2927 TEL 0287-43-0479

「リスぐるみ」

A4版8頁ほど、年4回発行

当会は第一に野幌森林公園に生息するエゾリスの生態や生活史を調査し、本園の森林環境維持に果たすエゾリスの役割について、その関係を明らかにすることを目的としています。

●発行：野幌エゾリス研究会

●連絡先：〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 道立野幌森林公園自然ふれあい交流館気付 野幌エゾリス研究会 上山剛司

e-mail：nopporo-squirrel@infoseek.jp

樹洞シンポジウム 開催のお知らせ

コウモリの会とリス・ムササビネットワークが共同で昨年からの準備をすすめてきました「樹洞シンポジウム」がいよいよ開催されます。樹洞性動物の研究者の方々、樹木治療にたずさわるの方々、そして行政の方々など、各方面のスペシャリストを招いてのシンポジウムです。ぜひ、多くの方のご参加をお待ちしています。

<樹洞シンポジウム>

「樹洞は誰のもの？—樹洞性動物の保護と樹木保全の両立を目指して」

■期日：2003年5月10日（土）

■場所：国立科学博物館新宿分館

<フィールドトリップ>（人数限定）

「樹木治療と野生動物のすみかを見る」

■期日：2003年5月11日（日）

■場所：東京都あきる野市周辺

【主催】樹洞シンポジウム実行委員会（コウモリの会／リス・ムササビネットワーク）

コウモリフェスティバル 開催のお知らせ

コウモリについてのさまざまな展示、アブラコウモリ観察会、講演会「コウモリ学入門」、懇親会などを2日間にわたって企画しています。皆さまぜひご参加ください！

「第9回コウモリフェスティバル in 上野動物園」

【主催】東京都恩賜上野動物園、コウモリの会、（財）東京動物園協会

【日時】2003年8月2日（土）・3日（日）

【会場】上野動物園 西園動物園ホール、他

<講演会・動物園セミナー>

「コウモリ学入門」

【参加】無料、事前予約必要（A4判、約40頁の資料を用意します。）

【対象】中学生以上 160名

第9回コウモリフェスティバルの一環として、コウモリの本当の姿をわかりやすくお伝えします。コウモリ学について、さまざまな分野で活躍されている研究者の方々の講演です。

■会員の皆様へ■

東京都武蔵野市にある井の頭文化園において、ニホンリスに関するワークショップと公開シンポジウムを開催する予定です。この企画には、担当者である井の頭自然文化園飼育係長の伊東員義氏からの要請により、リス・ムササビネットワークとして協力することになりました。今後、詳細等決まりましたらご報告致します。開催日については2003年8月23日(土)がワークショップ、8月24日(日)が公開シンポジウム(場所:井の頭自然文化園 資料館を予定)となっております。興味のある方はぜひともご予約をあげておいて下さい。また、準備等のお手伝いいただける方は事務局までご連絡下さい。

■メールアドレスについて

メールアドレスをお持ちの方には今後、当会の活動情報やイベント情報等を不定期にお知らせするつもりです。すでにメールで当会の活動等のお知らせを何度か配信させていただいているのですが(不要な方はお申



<イラスト:浅野智子>

し出下さい)、事務局から何も連絡が届いていない方で、情報の配信を希望される方がいらっしゃいましたら、事務局(BXQ01747@nifty.ne.jp)までお知らせ下さい。現在会員の約7割程度の方のアドレスを把握している状況です。

■会員のご継続について

会費が不足されている方については、本号とともに「会員の継続ならびに会費のお振込みのお願い」を同封致しました。何とぞ、会員ご継続のお手続きをお願いします。また、住所変更等がありましたら、事務局までお知らせ下さい。

■バックナンバーについて

新たに入会される方の中で「リスとムササビ」のバックナンバーを入手したいとの問い合わせが多くあります。会では一律(号によってページ数が異なりますが)一部300円という事で、購入していただくことにしました。但し、No1については残部が残り少ないため、コピー(実費)になります。

■原稿、イラスト、表紙写真募集!

リス類に関する投稿原稿を募集しています。書式・内容等は自由です。また、イラスト(リス類だけでなく、自然物の描写ならなんでも)、表紙写真(簡単なコメントをつけて)も募集しています。お気軽に事務局までお寄せ下さい。次号の原稿等締切は2003年4月末日です。

■会員募集 & 入会案内

リス・ムササビネットワークでは随時、新入会員を募集しています。年会費(会計年度は1月~12月)は1,000円です。入会された方には会報を年2回(不定期)送付致します。

入会方法は、ハガキ・FAX・E-mail(BXQ01747@nifty.ne.jp)にて下記の必要事項等を事務局までご連絡



リス・ムササビネットワーク

下さいます。また、同時に郵便振替で年会費1,000円(複数年振込可)をお振込下さい。振込先は郵便振替口座番号 00240-5-29219 加入者名リス・ムササビネットワークです。

***** 必要事項 *****

[氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、電話およびFAX(自宅か勤務先か在学习先かを明記)、所属、あればE-mail、興味のある種類や分野など]その他、会への希望、自己紹介、入会経路などなど、ご自由に!

■リス・ムササビネットワーク事務局ヘルパー募集!

樹洞シンポジウムや井の頭自然文化園でのニホンリスワークショップ&公開シンポジウムなど、会としての活動が活発化してきました。それに伴い、事務局の作業も多くなってきたので、この機会に会報の編集作業(パソコン、メールをお持ちの方、編集ソフトを使える方)や発送作業(お近くにお住まいの方)をお手伝いいただける方を募集します。ご協力のほどお願い申し上げます。

本号の表紙写真:

樹洞から顔を出すムササビ

撮影:岡崎弘幸

これは1992年6月に東京都西多摩郡檜原村のとある神社で撮影したもの。樹洞から顔を出すのはムササビのお決まりのポーズである。しかし、なかなか目が反射しないように撮影するのは難しいとのこと(岡崎談)。

リスとムササビ No.12

SCIURID INFORMATION December,2002

- 発行 リス・ムササビネットワーク
- 編集委員 安藤 元一 押田 龍夫 川道 武男
川道 美枝子 柳川 久
- シンボルマーク 大高 利之
- 編集 築田 真由美
- 発送 築田 真由美

■郵便振替口座番号 00240-5-29219

■加入者名 リス・ムササビネットワーク

【編集後記】◆会報を立て続けに編集・発行して、少々疲れ気味の事務局です。これでやっと事務局にも春が来ます(笑)。◆2003年5月10日の樹洞シンポジウムはリス・ムササビネットワークとしては哺乳類学会外の初めての活動です。会員の皆さまのご参加期待しています。この機会にぜひともお会いして会員間の交流をはかりましょう! ◆次号の編集は帯広チームにお願いしました。次号は「2002年度哺乳類学会での活動」についてご報告いたします。

□リス・ムササビネットワーク事務局 □

〒227-0066 横浜市青葉区あかね台1-21-14-B 築田真由美

TEL&FAX 045-989-1004 E-mail BXQ01747@nifty.ne.jp

©2002 Japan Network of Scirid Researchers